

思えてくる。ところで、子どものこのような素直な世界認識行動がなぜなのか、いつのまにか失われてしまう。近年では小学校高学年でその兆候が現れたりするのだが、私は困惑を禁じえない。これは、二

十年余りを子どもとともに表現運動を遊んできての切実な実感である。

(横浜国立大学)

漢字と日本語

渡辺 純一

最近の受験ガイドブックのなかには、漢字の書き取りの勉強はするな、と指導するものがあるそうです。努力の割に配点が低いので効率が悪いと言うのです。たしかに大学入試という目的の前には、効率が重要でしょう。しかし、人生、いつもゴールが決

まっているわけではありません。目標を見つけることの方がもっと大切かも知れません。ガイドブックの著者が最難関の医学部に合格しながら、もっぱら受験指導に力を入れているのは、手段と目的を取り違えたとは言えないでしょうか？

小学校で、国語の勉強と言えば漢字の書き取りというくらい、漢字の習得は生徒にとって負担の大きなものです。明治時代以降、我が国が欧米の物文化の輸入に必死になっていたとき、漢字を使わないかなもじ主義や、ローマ字会などが提唱されたことがありました。漢字学習の負担を軽くして西欧の文明をより効率的に取り入れようという考えでした。しかし、今日、我が国ではこのような意見はすつかりすたれてしまいました。

さて、とまとると、とどまるを辞書で引いてみると、意外なことに漢字表記はほとんど同一です。泊まる以外の、止まるも、留まるも、停まるも、とまとると、とどまるの両方の読み方と意味を持っています。

とまる、止まる、留まる、停まる、泊まる
 とどまる、止まる、留まる、停まる

ですから、漢字で書かれた文を読む場合、「とまる」のか「とどまる」のかは、文脈から自分で判断しなければなりません。これらは、同一表記に複数の音と意味が対応する例ですが、反対に、同じ音に複数の意味と表記が対応するのが同音異義語です。

同音異義語の多さこそは、日本語がかかえる大きな問題です。快晴、改正、改姓…。かいせいには十三種類。きせいでは、寄生、規制、規正、帰省、既成…十九種類もの同音異義語があります。漢字なしではとても区別がつきません。我が国が漢字まじりかな表記を使用し続けているのも、同音異義語の数の多さが主な理由となっています。

音と意味と表記は、言語の三要素です。それぞれが一对一に対応すればよいのですが、必ずしもそうならない場合、いびつな三角関係が生じてしまいます。万葉集の時代から、我が国は、中国から漢字を取り入れて使ってきました。複雑な発音体系を有する中国語からはるかに発音の単純な日本語に多数の

言葉が輸入されたわけですから、同音異義語が多数生じたのはやむを得ないことでした。

ところで、最近のワープロは、音入力、表記出力という意味で画期的な発明だと考えられます。音と意味と表記の三要素をパソコンで自由に変換するのですから。問題の同音異義語は、意味で選択するようになっていきます。選択に迷っているとそれぞれの単語の意味の説明が表示されるようになってくるものすら登場しています。ワープロによって漢字の使用は容易になり、漢字廃止論は全滅しました。これに対し英語のワープロ・タイプライターは、表記入力、表記出力ですから、真のワープロとは言えません。綴り字の間違いを指摘するのが精一杯です。

最近、中国の上海と韓国のソウルを旅行する機会がありました。初めて見る上海の高層ビルが建ち並び発展ぶりには、これが本当の社会主義国なのかと目を見張りました。この国が、二〇〇八年の北京オリンピックと二〇一〇年の上海万国博覧会を同時に

準備中だと聞いて、底知れぬ潜在力を実感するとともに近未来の躍進を予感させられました。中国旅行でありがたいのは、漢字でおおよその見当がつくことです。人民公園二元とあれば入場料二元と分かりますし、下町の露店には、「焼肉 1 串 1 元」と出ているので、一元コイン（約十五円）を差し出すと、一串渡してくれます。しばらく行くと「1 串 1.5 元」となっているのでよく見ると「羊肉」と値段が高い訳が分かります。漢字のおかげで実に居心地よく過ごせました。

ところが、二十年ぶりに訪れた韓国は、すっかり様変わりしていました。町中にハングル（韓国文字）があふれていて、漢字はほとんど見かけません。新聞を見ても、漢字はほんの数文字でちんぷんかんぷんです。以前には、漢字だけで内容が大体わかったものです。当時、漢字を徹底的に排除したのは北朝鮮で、それだけに韓国は漢字の使用にこだわっているようでした。それがこの変貌ぶりです。

顔形が変わらないだけに、自分ひとりが迷子になったような疎外感にさいなまれました。

五個の母音と十四個の子音しかもない日本語と比較して、韓国語には母音が二十一個、子音が十九個もあるので、音声体系は日本語よりはるかに複雑で、同音異義語の数も比較的少数です。大概は文脈から見当が付きませんが、それでも、区別が困難な場合には、英語の単語に置き換えるのだそうです。

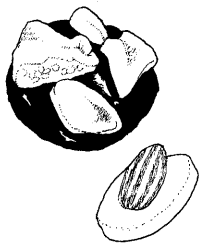
ところで、韓国でも、現在は学校教育の過程で一八〇〇個の漢字を教えています。新聞は、シンムン、地下鉄はチハチョル。韓国語には漢語由来の言葉がたくさん使われています。それで、漢字をほとんど使わなくなった今日でも、言葉の元にある漢字を覚え言葉の成り立ちを理解することが重要だと考えられているのです。

しかし、現実には、若い人の漢字力は低下する一方です。ソウル大学の年輩の教授が嘆くのは、「彼らは、英語の論文は読めても、私が二十年前に書いた

韓国語の論文が読めないんだよ」。論文のなかの専門用語が漢字になっていたのでそれが読めないために理解できないのです。いくら学校で漢字を教えても、実生活では使わないのですから、漢字ばなれは進む一方でしょう。おとなりの韓国でいつまで、漢字教育が続けられるのか、人ごとながら心配に感じました。

つぎに、その先生がベトナムを訪問した際の話になりました。ベトナム語の大学はダイホック、学生は、ホックシン。発音を聞くと理解可能で痛快。韓国の学生よりよほどましだと言わんばかりでした。しかし、ベトナムでは、数十年前に漢字を廃止し、今日ではローマ字を使用しています。

日本、韓国、ベトナムと、本家の中国は、漢字の使用に関する限り、それぞれ異なる道を歩み始めました。



今、言葉を覚えている子どもたちが壮年に達する二十一世紀後半、これらの国々は、どうなっているのでしょうか？ 漢字による筆談は、パソコンの自動翻訳に置き換わっているかも知れません。

話し言葉は、生まれてから十二歳までにほぼすべてが決まってしまうと言われています。読み書き

も、七歳から十五歳でほとんど完成します。母国語を覚える機会は人生に一度しかありません。そのことを思うと、子どもたちの柔軟な頭脳に日々吸収されていく母国語が、正確で豊かで美しいものでありつづけることを切に願わざるをえません。

(東京大学医科学研究所)

とどまれなかった私

田中三保子

「とどまる」ということばから私が最初に思い浮かべたのは、私が「とどまることができなかった」と実感した保育体験である。私はE子に閉じこめられ

た。その体験も含めて、私はE子とのかかわりを「子どもが自分で乗り越えるとき」としてすでに書いたのであるが(本誌第九十一卷第十二号)、その